

心を鎧わらないでいられる時間

志茂田 景樹

(作家)



中学の修学旅行で京都を初めて訪れた。

六十年も前のことで、今の修学旅行よりもずっと点と線の旅行だった。当時、幕末維新の時代を描いた小説、漫画、映画が好きだった僕は胸を躍らせて京都の地を踏んだが、点を回り始めて少々がっかりした。

金閣銀閣より僕は高台寺が見たかった。二条城の庭園より池田屋跡だった。何だか消化不良のまま、次の目的地の奈良へ向かったものだった。

二度目に京都を訪れたのは大学を卒業する年の春休みということで、学部こそ違ったが、親友のFと一緒だった。粹に言えば卒業旅行ということになる。

東北生まれの彼は初めて京都を訪れたものだからずっと興奮の面持ちだったが、幕末維新の歴史にはまったく関心がなく、修学旅行で回った名所旧跡を見て回りがった。優柔不断な僕は彼の案内人になった。もっとも小遣いが潤沢そうなFの機嫌をとっといたほうが得になるという計算も働いていたと思う。

ただ蕎麦好きの僕は旅行案内書で調べておいた祇園のMという店のニン蕎麦を食べることに固執した。

「京都へ来て、そんなもん食うのかよ」

東北で生まれ育った彼にはニンシでも蕎麦もありふれすぎた存在で、京都と

紅おしろい
祇園屋

京・東山区川端四条上ル
井筒八ッ橋本舗 北座
075-531-2127

英国生れの紙白粉



舞妓さん・芸妓さん必携の
お化粧直し 油とり紙

よく結びつかなかったらしい。

だが、運ばれたニシン蕎麦をガツガツ食べたし、途中で箸を休めて、

「ニシンは京都に限る」

と、言って笑った。

海に程遠い盆地の京都で食べたニシン蕎麦の旨さを有名落語のオチである(サンマは目黒に限る)に重ねたつもりだったが、僕は笑ってやらなかった。


食後、昼下がりでひっそりした祇園の小路を縫い歩いたが、彼は早く八坂神社に行きたがった。東山三十六峰静かに眠る丑三つ刻、突如起こる剣戟の響き：僕は鞍馬天狗の映画の冒頭のナレーションか何かで覚えたこの言葉を口ずさみながら、幕末期にもこの界限は剣戟の響きには無縁だったのだろうとぼんやり思った。

講演や、イベント出演で京都の地をしばしば訪れるようになって、この街は建物と佇まいが黙って歴史を語る街なのだと思いついた。

主催者は大体京都駅至近のホテルの部屋を用意してくれる。朝食前のウォーキングを習慣にしている僕は早朝の街へ飛び出す。新選組を脱退した伊藤甲子太郎率いる御陵衛士一党、俗に高台寺党が立てこもった高台寺も、その伊藤甲子太郎が近藤勇らの奸計にはまり暗殺された油小路通りも目的を持って訪れたところではない。好きな道、気が向いた路地を歩き回って偶然そこへ出たのである。

京都の街は歩けば歴史に当たる。朝の祇園を歩いて、この街から例え幻聴でも剣戟の響きが聞こえないのは呉越同舟の街だからだと納得した。

ここでも剣戟の響きは起きたかもしれないが、原則的には過激浪士も新選組も共に平和な心にしてくれる街だったのだろう。



ぎとん
鰻と割烹 梅の井

京都市東山区円山公園内 561-1004